

おふでさきの 世界を歩く

第

6

回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】

本部准員

天理教校本科研究課程主任

一号21—44（その2）

一号31—44
「あくじ」を退ける

これまでのさんねんなるハなにの事

あしのちんばが一のさんねん

このあしハやまいとゆうてゐるけれど

やまいでハない神のりいふく

りいふくも一寸の事でハないほどに

つもりかさなりゆへの事なり

りいふくもなにゆへなるどゆうならハ

あくじがのかんゆへの事なり

（一）
31

（一）
32

（一）
33

（一）
34

このあくじすきやかのかのけん事にてハ

ふしんのしやまになるとこそしれ

このあくじなんぼしづといものやどて

神がせめきりのけてみせるで

このあくじすきやかのかのけた事ならバ

あしのちんばもすきやかとなる

あしさいかすきやかなをりしたならバ

あとハふしんのもよふハかりを

一寸はなし正月三十日とひをきりて

をくるも神の心からとて

そバナものなに事するとをもへども

（一）
35

（一）
36

（一）
37

（一）
38

（一）
39



さきなる事をしらんゆへなり

(一 40)

そのひきてみへたるならバそばなものの

神のゆう事なにもちがはん

(一 41)

いま、でハ神のゆう事うたこふて

なにもうそやとゆうていたなり

(一 42)

このよふをはじめた神のゆう事に

せんに一つもちがう事なし

(一 43)

だん／＼とみへてきたならとくしんせ

いかな心もみなあらはれる

(一 44)

〈当時の「おやしき」の様子〉

前の段落で「やしきの掃除」を仕立てると述べられていましたが、それは具体的にどうすることなのか。それが示されるのが、この段落です

31で、「これまでに神が残念にもどかしく思っていることは何かというと、いま秀司しゅうじの足の患いに現れていることが第一の残念なのだ」と述べられ、そのうえで、32と33で、その足は病ではなく、神の立腹が長年積もり重なったうえでのものだと言われています（※1）。

さらに、34では、その立腹は何に由来するかとい

うと、「あくじ」が退かないからであると言ひ明かされているのです。

この一連のお歌を理解するためには、当時の「おやしき」の状況を振り返る必要があります。『おふでさき註釈』39の註には次のように記されています。

註

秀司先生は長年独身で正妻無く、おちゑという内縁の妻があつて、音次郎おとじろうという子まであつた。そしてお屋敷に同居せしめておられたが、

これは元々親神様の御思召おぼしめしに沿わぬ悪事から

始まったものであつたからして、このおちゑを

実家へ送り帰かえすようにと仰せられたのである。

秀司様にはおちゑという内縁の女性があつて、この方を「おやしき」から実家へ送り帰すよう、教祖は秀司様におっしゃつていたと記されています。

おちゑとの間に、数え九歳の音次郎という息子がいたことから、この女性との縁は長いものであつたことが分かります。文献によつては、立教直後から三十年以上も続いていたと伝えているものもあります（※2）。このおちゑが、明治に入つたころ、子供を連れて中山家へ移り住むようになったと言われています（※3）。秀司様にしてみれば、内縁関係で



あるとはいえ、長年の縁がある女性を送り帰すよう諭されているわけであり、なかなか得心がいかなかったに違いありません。周囲の人の中にも、「教祖は何をなされるのか」と疑問に思う人がいたと想像されます。

〈あくじ〉とは何か

ここで、注意したいことは、「おふでさき」において、教祖は何を「あくじ」とされているのかということです。正式な結婚でなく、内縁関係であることを「あくじ」と言われているかという、そうではないように思います。

お歌に込められた神意を読み取るためには、教祖が言われる「あくじ」の意味を、「おふでさき」の中に求めることです。このことに関しては、澤井勇一『『おふでさきを読む』(道友社、立教161年)が読み方を明確に指し示してくれています。

同書によると、「あくじ」という言葉は、第十三号にもう一度、出てきます。

けふまでわどんなあくじとゆうたとて
わがみにしりたものハあるまい (十三 41)

この心神がしんちつゆてきかす
みないちれつわしやんしてくれ (十三 42)

と断られたうえで、「あくじ」の心とはどういう心であるかということが、第十三号43以下のお歌で示されています。

せかいぢういちれつわみなきよたいや
たにんとゆうわさらにないぞや (十三 43)

このもとをしりたるものハないのでな
それが月日のざねんばかりや (十三 44)

高山にくらしているもたにそこに
くらしているもをなしたまひい (十三 45)

それよりもたん／＼つかうどぶぐわな
みな月日よりかしのなるぞ (十三 46)

それしらすみなにんけんの心でわ
なんとたかびくあるとをもふて (十三 47)

ここでは、「かしの・かりもの」の教理をもとに、「世界中は一れつはみな兄弟姉妹で、他人というは一人もいない」「高山に暮らしている者も谷底に暮らしている者も同じ魂である」と述べられています。そして、こうした真実に反する生き方、つまり「一れつ兄弟姉妹」ということを知らずに、人を他



「おやしき」について

先人の手記には、「お屋敷の理」について、次のように記されています。

このやしきを、おちばく、もとの、ぢばく、おやの、そばく、といふてくるこどもの、こゝろは、よきも、あしきも、みなうつる。それ、かみがうけとる。うけとれば、それかやしといふ。ちやうど、かみのまへにゆけば、わがすがたが、かみみにつり、また、わがのめに、みゆるやうなもの。それでかみやしきといふ。またひとつ、そのよりくるこどもを、どこにへだてないのが、これ、しはうしやうめんといふ。

(略) このかみやしきにへだてのないのが、しはうしやうめんなら、いちにんくゝのりもおなじこと。いかなるものにも、へだてせず、いつもかはらぬ、まことのこゝろをもつて、せかいから、なるほどのひとやなあ、なるほどのものやなあといはれるやうに、それ、しはうしやうめんの、こゝろでなくばならうまい。(『正文遺韻抄』道友社、昭和45年、215—216ページ)

ここでは、「鏡やしき」という言葉とともに、「四方正面」という言葉で、「おやしき」とはどういう所であるかということが述べられています。寄り来る子供に隔てないのが「四方正面」であり、それが神の心である。神のように隔てをせず、いつも変わらぬ誠の心で、世の中の人から成程の人やなあと言われるような「四方正面」の心でいることが、「おやしき」に住む一人ひとりの心がけでなければならぬと諭されています。

このほかに、『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、「おやしき」についてふれられた逸話

人として隔てをして暮らす生き方、同じ魂であるのに人と人の間で高低があると思う心、それらを「あくじ」の心として教えられていることが分かります。

『おふでさきを読む』においては、次のように述べられています。

「あくじ」については、『おふでさき』の第一号で、まず事柄をとおしてお示しくださり、ずっと

あとの第一三号になって、「あくじ」の説明をしていただいている。(略)

他人として、へだてをして暮らす。それが、「あくじ」である、とおおせられている、と思います。

(略)

当時、家の格式がどうか、家柄がどうかであるとか、そのように「家」というものを、大

があります。特に、「一六三 兄弟の中の兄弟」というお話では、

「この屋敷に住まっている者は、兄弟の中の兄弟やで。兄弟ならば、誰かが今日どこそこへ行く。そこに居合わせた者、互いに見合せて、着ている着物、誰のが一番によい。一番によいならば、さあ、これを着ておいでや。又、たとい一銭二銭でも、持ち合せている者が、互いに出し合って、これを小遣いに持って、さあ行っておいでや。と云うて、出してやってこそ、兄弟やで」

と「おやしき」に住まいする人の生き方を教えられます。

このような隔てのない、誠の通り方は、教祖が立教以来、長い年限をかけて教えられてきた生き方です。

事にして生きた時代です。そのことに固執される。そちらのほうに意味をみつけれられた。そして、おやさまのおはなしくださること、あるいは、身をもってお教えくださることに、すこしも意味をみつけることができなかった。

（澤井勇一『おふでをよみ読む』83—84ページ）

このような点を踏まえると、第一号のこの場面で見られる「あくじ」とは、「隔て」をする生き方、具体的には、教祖のおっしゃることを疑って「なにもうそやとゆうていた」（42）、おちゑの心づかいや生き方のことを指しているのではないかと考えられます。教祖は、おちゑを出すことを通して、「おやしき」の中からそのような「あくじ」の心を退かそうとされたのではないでしょうか。

おちゑに関して、よく「魂のいんねんがなかったから、おやしきにおられなかったのだ」と言われることがあります。が、「おやしき」への「いんねん」は誰しも持っているものです。心づかいがかなわなかったため、おれなくなったというのが、「おふでさき」から読み取ることのできるようです。ただ、それについても教祖は、おちゑの心づかいを長年に

わたって見てこられたうえで、もうこれ以上置いてはおけないというところから、出すことにされたのではないかと想像します。

秀司様は、このお歌に従い、おちゑと音次郎を、（明治二年の）正月三十日と日を切つて、川原城村（現在の天理市川原城町）に送り帰されましたが、おちゑは、日ならずして出直したそうです。

44では、「だんだんと、神の言ったことが現れて、見えてきたら、得心をするようにせよ。どんな心もみな現れるのだ」というように、おちゑの心づかいを身上として現すので、これを見て、教祖の言われることをよく得心するようにと述べられています。

この出来事を通して、秀司様はじめ周囲の人々は教祖の言われたことに間違いはないのだと納得するようになったと言われています。

「おさしづ」には、

このやしき神やしきと言う。どのようにも言う。皆伝えるよう。すつきり掃除が出来ねば寄る理はない。（略）すつきり掃除出来んようでは払うまでやない。めん／＼より払われる理を^{こしら}ええるのやで。

（明治24・11・15）

と記されています。おちゑの事柄を通して、教祖は、「おやしき」とはどのような所で、どのような生き方をしないといけないのか、ということ周囲の人々に徹底して伝えていこうとされたのではないのでしょうか。

「みかぐらうた」に、

なにかこゝろがすんだなら

はやくふしんにとりかゝれ

(八下り目 7)

と、「心が澄んだら、ふしんに取り掛かるようにする」と歌われています。これから「つとめ」を本格的に教え、「世界のふしん」に取り掛かっていくにあたって、まず「ふしん」の邪魔になる「あくじ」

の心を「やしき」から退け、「やしき」に住む人々の心を澄まそうとされたのです。「つとめ」という言葉こそ使われてはいませんが、世界一れつをたすけたいとの親心から、「つとめ」の完成に向けて、「やしきの掃除」に取り掛かれたのです。

※1 ここでは、秀司様の足が長年悪いままであることを言われているのではなく、このときの足の痛みに対して言われているのではないかと理解している。

なお、秀司様の足が完治せずにいることについては、

後にそれは「つとめの試し」

が掛けられているからであると教えられている。このこと

については、第十二号、第十五号で詳しく言及されている。

したがって、37のお歌で「あくじ」を退けたら「あし

のちんばもすきやかとなる」

と言われていることについて、

その意味するところは、「あくじを退け、いずれ『つとめ』

も勤められるようになり、それによって、足の身上もすつきりと治してやろう」という

ことだと理解する。

※2 『改訂正文遺韻』天理

教山名大教会史料部、平成26年、243ページ参照。

※3 高野友治『高野友治著作集第六巻 神の出現とその

周辺』道友社、昭和54年、145ページ参照。

おふでさき
の世界
を歩く

